

## ルーマニア語における k', g' の特異性

倍 賞 和 子

1. ルーマニア語の口蓋化された k, g [k', g'] は、従来の音素体系においては非口蓋音 [k, g] と区別されなかった<sup>1)</sup>つまり同一音素 /k, g/ が異なった環境において現われる変種にすぎないと説明されていた。ところがルーマニア語にはこれと異なった音素として立てたほうが都合がよいと考えられる色々な事情があるのである。すでにこれを異なった音素としての表記法を用いている研究者もある<sup>2)</sup>。またルーマニアの音声・音韻学者 Emanuel Vasiliu はその *Phonologia limbii române*<sup>3)</sup> において 20 個の子音音素を区別していたが、さいきんの論文<sup>4)</sup> では k', g' を独立させる方向に傾いている。当論文においては、かれの発表している根拠に加え、そのほかいくつかをあげて、その妥当性を検討してみたい。

2. 従来 [k', g'] が /k, g/ の環境による変種と説明されてきたのには、それ相応の理由がある。[k', g'] と [k, g] とは完全に環境同化をもって説明しうるような相補分布をなしているのである。そのことは /p/ を対照してみればわかる：

pare 「見える」	care /kare/ 「どれ」 <sup>5)</sup>
părți 「部分」 (pl.)	cărți /karți/ 「本」 (pl.)
pâine 「パン」	cîine /kîine/ 「犬」
pot 「できる」 (1 sg., 3 pl.)	cot /kot/ 「ひじ」
pui 「置く」 (2 sg.)	cui /kui/ 「釘」
repeadă 「急ぐ」 (接3)	cheamă /keamă/ 「呼ぶ」 (3)
pere 「梨」	chel /kel/ 「禿げた」
pin 「松」	chin /kin/ 「苦痛」
aripioară 「小翼」	chior /kior/ 「片目の」
piuneză 「紙」	chiul /kiul/ 「瞞着」

上に見られるように、/k/ を用いて完全に表記しうるのである。もし /k'/ を用いるなら、前母音のまえにある /k/ のみ /k'/ と表記されることになり、また二重母音を一個の母音とし、/k'amă/, /k'or/, /k'iul/ と表記することができるが、これは /k'eamă/, /k'ior/, /k'iul/ と書いても一向に差支えないわけであるから、/k'/ を別個の音素として立てることは、経済の原則からみても許されないことになる。すなわち少くとも純粋音韻論の立場からは、/k', g'/ を /k, g/ と別の音素とすることは許されないことになる。ではこれらの音素を立てる根拠はどこに求められるかという点、それはもっぱら形態音韻論のおよび形態論的理由によるのである。その妥当性について論じるまえに、いくつかの例をあげてみる。

3. 例 1: ルーマニア語の名詞のうち、男性・中性というカテゴリーに分類されるものの多くの単数形は、子音, u, e, または母音 + i で終わっている。ところが例外的に、綴字上、子音 + i で終わっているものがある: arici 「ハリネズミ」, baci 「牧童頭」, clenci 「鈎」, bîlci 「大市」, ochi 「眼」, unchi 「おじ」, trunchi 「幹」, junghi 「刺痛」, unghi 「角」など<sup>6)</sup>。

途中ながら、ここでルーマニア語の語末のアクセントのない -i の発音について一言述べ

てみたい。

$$\left. \begin{array}{l} /i/ \rightarrow [i] \quad / \dots Or, Cl \text{ --- } \# \\ /i/ \rightarrow [j] \quad / \dots V \text{ --- } \# \\ /i/ \rightarrow [j] \quad / \dots C \text{ --- } \# \end{array} \right\} 7) \quad (1)$$

という式で表わすことができるように、まず子音または子音連続+rまたはlのあとでは母音〔i〕として、母音または二重母音のあとでは半母音〔j〕として、子音またはさいごの要素がr, lでない子音連続のあとでは無声化した〔j̥〕として発音される。そしてこのさいごのばあい、実際には前の子音を口蓋化する程度に発音される。もちろん音節はつくらない。Vasiliiは第2,第3のばあい、/i/の前にゼロ子音を表わす音節 juncture を設定し、それを+で表記し<sup>9)</sup> /porʃ + i/ 「門」(pl.)のようにし、iが母音の性質を失うことを表記しようとしている。いずれにせよこの/i/の3通りの発音は、環境が明らかに異なっているのに、なんらかの方法によって表記することは困難でない。したがって当論文においては等しく/i/と表記することにする。—#において、つまり語末で/i/が現われるのは、名詞系<sup>10)</sup>の語の男性複数にもっとも多い。例をすこしあげよう：

(単数)	(複数)		
codru	codri	[ kodri ]	「森」
tigru	tigri	[ tigri ]	「虎」
bou	boi	[ boj ]	「牡牛」
flăcău	flăcăi	[ fləkəj ]	「若衆」
pom	pomi	[ pomj̥ ]	「果樹」
soț	soți	[ sotsj̥ ]	「夫」
mecanic	mecanici	[ mekanitʃj̥ ]	「機関士」
fag	fagi	[ fadzj̥ ]	「ブナ」

ここで話をもどし、綴字上単数形が子音+iで終わっている語について考えたい。いくつか例をあげると：(, の左は単数, 右は複数, また意味については上掲p.26を見よ) arici, arici; baci, baci; ochi, ochi; unchi, unchi; clenci, clenciuri; bîlci, bîlciuri; trunchi, trunchiuri; junghi, junghiuri; unghi, unghiuri.

まず-ciで終わっている arici, baci についてみると、これはちょうど mecanicの複数形 mecanici と同じく /č + i / とも考えられる。

しかし、1) ルーマニア語には /č / を表わす単一の文字はなく、ci, ceによらざるをえないので、このiは正書法上の必要からあるだけで、音素 /i / を表わすものではないと考えられる。2) 先に述べたように、無声化〔j̥〕は前の子音を口蓋化するにとどまるので、口蓋子音にとって後の〔j̥〕の有無は実際の発音には影響を与えない、という二つの理由から、これらの語の単数は /arič /, /bač /, /klenč /, /bîlč / であると考えることができる。

次に -chi, -ghi で終る ochi や unchi についても、もし -chi, -ghi を /k', g' / であると考えれば、上と同じように解釈される。つまり単数形は /ok' /, /unk' /, /trunk' / などであり、複数形は /ok'i /, /unk'i /, /trunk'uri / と解釈するのである。ところが /k', g' / という音素を認めないばあい、これは /ki /, /gi / とせざるをえないから、単数において子音+iで終る特別な型の名詞として記述しなければならない。と同時にこの /i / は base に入れたほうがよいか、それとも屈折接辞としたほうがよいかについて、後に述べ

るような色々な複雑な問題がでてくる。

4. 次に綴字上 -i で終る形容詞 *vechi* について考察してみよう。ルーマニア語の形容詞をその屈折接辞から分類すると、非常に多くのカテゴリーができる。例を二・三あげてみる。

いま主格形のみをあげ、男性単数、女性単数、男性複数、女性複数の順にならべる：

<i>bun</i> - $\emptyset$	<i>bun</i> - $\check{a}$	<i>bun</i> - <i>i</i>	<i>bun</i> - <i>e</i>	「良い」
<i>acr</i> - <i>u</i>	<i>acr</i> - $\check{a}$	<i>acr</i> - <i>i</i>	<i>acr</i> - <i>e</i>	「すっぱい」
<i>mar</i> - <i>e</i>	<i>mar</i> - <i>e</i>	<i>mar</i> - <i>i</i>	<i>mar</i> - <i>i</i>	「大きい」
<i>verd</i> - <i>e</i>	<i>verd</i> - <i>e</i>	<i>verz</i> - <i>i</i>	<i>verz</i> - <i>i</i>	「緑色の」
<i>galbui</i>	<i>galbui</i> - <i>e</i>	<i>galbui</i> <sup>n)</sup>	<i>galbui</i>	「黄色がかった」
<i>greoi</i>	<i>greoai</i> - <i>e</i>	<i>greoi</i>	<i>greoai</i> - <i>e</i>	「鈍い」
<i>vechi</i>	<i>vech</i> - <i>e</i>	<i>vech</i> - <i>i</i>	<i>vech</i> - <i>i</i>	「古い」

複数形はいま問題にせず、まず男性単数形について観察してみよう。-i で終っているものには *vechi* のほか、*greoi*, *galbui* などのように母音 + i [j] がある。この -i を base に入れるべきか、男性単数主格の屈折接辞とみなすかは、1) 名詞の男性単数形において、前述のように -i を base に入れる解釈のほうが都合がよいこと、2) -i を base に入れると女性単数形屈折接辞として -e が残るが、base に入れないばあい、-ie となって均衡がとれない<sup>2)</sup> の理由から、屈折接辞とみなすより、base に入れるほうがよいことがわかる。

さて、ルーマニア語には

$$/ \check{a}, \hat{i} / \rightarrow / e, i / \quad / \text{口蓋音} \quad (2)$$

という式で表わすことのできる法則がある。口蓋音、または口蓋化した音のあとに / $\check{a}$ ,  $\hat{i}$ / は現われず、かならず /e, i/ が現われるのである。この法則を用いると、/*galbui* - e/ は /<sup>\*</sup>*galbui* -  $\check{a}$ / の  $\check{a}$  が前の [j] のために /e/ となって現われていると考えることができる。こう考えると、この形容詞も典型的な名詞形屈折接辞すなわち男性単数で - $\emptyset$ 、女性単数で - $\check{a}$  をとり、*bun*, *bun* -  $\check{a}$  とまったく並行することがわかる。

ところで *vechi* において、/k'/ を認めると男性単数形は /vek'/ と解釈されるから、その女性形 /<sup>\*</sup>*vek'* -  $\check{a}$ / の / $\check{a}$ / が /k'/ の口蓋性のゆえに自動的に /e/ となって現われると見ることができる。もし /k'/ を立てず、あくまで /ki/ と考えるばあい、この形容詞の単数形は

$$\begin{aligned} / \text{veki} - \emptyset / & \quad / \text{vek} - e / \quad \dots\dots \textcircled{1} \\ / \text{vek} - i / & \quad / \text{vek} - e / \quad \dots\dots \textcircled{2} \end{aligned}$$

の二つのいずれかと考えざるをえない。①においては、男性形と女性形において base が異なることになって都合がわるい。また②においては、名詞系男性単数主格の屈折接辞に -i を加える必要が生じると同時に、次に述べる法則にたいする例外となる。

5. ここで、ルーマニア語の形態音韻上ひじょうに広くゆきわたっている現象の一つを表わす法則を示そう：

$$/ k, g / \rightarrow / \check{c}, \check{g} / \quad / - \left[ \left\{ \begin{matrix} i \\ e \end{matrix} \right\} \dots\dots \right] \text{Flex}^{13)} \quad (3)$$

の公式で表わしうるもので、/i, e/ で始まる屈折接辞の前で、/k, g/ は / $\check{c}$ ,  $\check{g}$ / となって現われることを示す。たとえば *fiic* - a / *fiika* / 「娘」の複数形は *fiice* / *fii $\check{c}$ e* /、また *lung* / *lung* / 「長い」の複数形は *lungi* / *lungi $\check{c}$*  / となるように。また動詞 *merge* 「行く」、*trece* 「過ぎる」の活用において、この /k, g/ と / $\check{c}$ ,  $\check{g}$ / の交替がはっきり見られるので、次に

直説法現在の活用を示してみる：

単 数	1	merg	/merg/	trec	/trek/
	2	merg-i	/merg <sup>v</sup> -i/	trec-i	/treč <sup>v</sup> -i/
	3	merg-e	/merg <sup>v</sup> -e/	trec-e	/treč <sup>v</sup> -e/
複 数	1	merg-em	/mergem <sup>v</sup> /	trec-em	/trečem <sup>v</sup> /
	2	merg-eși	/mergeși <sup>v</sup> /	trec-eși	/trečeși <sup>v</sup> /
	3	merg	/merg/	trec	/trek/

そこで、vechi を /vek-i/ と解釈するばあい、上の法則によれば、これは /več-i/ となって現われるはずであるから、これはこの法則にたいする例外となる。/vek-i/ とすれば差支えない。/k'/ は法則(3)の適用を受けないからである。おなじく、先に問題にした ochi, unchi, trunchiuri など複数形においても、これを /ok-i/, /unk-i/, /trunk-iuri/ とすると上の法則の例外となる。ところが /ok'-i/, /unk'-i/, /trunk'-uri/ と考えると、上の法則の適用外となるから差支えないことになる。

6. 次に動詞の例を一つあげる。veghea 「見張る」であるが、この動詞は、少数の点を除いて、第一活用と称せられるカテゴリーに分類される特徴をもっている。このカテゴリーの動詞は、下に示すようにさらに大きく二種類に類別される。それはもっぱら直説法と接続法の現在形が異なっているためであり、他の時称においては二種類間に差異はない。例として veghea のほか三つの動詞をあげる：

	vegh-ea	băg-a 「入れる」	lucr-a 「働く」	apropi-a 「近づく」 <sup>F)</sup>
直 現 単	vegh-ez	bag	lucr-ez	apropi-i
	vegh-ez-i	bag-i	lucr-ez-i	apropi-i
	vegh-eaz-ă	bag-ă	lucr-eaz-ă	apropi-e
複	vegh-em	băg-ăm	lucr-ăm	apropi-em
	vegh-eși	băg-ași	lucr-ași	apropi-eși
	vegh-eaz-ă	bag-ă	lucr-eaz-ă	apropi-e
現分 <sup>G)</sup>	vegh-ind	băg-înd	lucr-înd	apropi-ind
過分	vegh-eat	băg-at	lucr-at	apropi-at

この例からわかるように、このカテゴリーのうちのあるものは、lucra のように現在形において -ez という接辞をとる。ただし先にも述べたように他の時称においてはまったく同じような活用をおこなう。このカテゴリーの特徴としては、不定詞がアクセントある -a で終ること、一人称複数形が -ăm, 二人称複数形が -ași, 過去分詞が -at, 現在分詞が -înd に終ることがあげられる。

動詞 veghea の活用を見てすぐ気付くことだが、これを /veg-ea/, /veg-em/ などと解釈すると、法則(3)に反することになる。次に、この活用の特徴である -ăm, -înd が veghea においては veghem, veghind となっている。動詞 apropia においても /\*apropi-ăm/, /\*apropi-înd/ となっているが、これは法則(2)により、前の {j} のゆえに -ă, -î が自動的に /e/, /i/ となったと考えられるから問題はない。そこでもし /g'/ を立てると、/\*veg'-am/, /veg'-înd/ が同じ法則により、/g'/ の口蓋性のゆえに /veg'-em/, /veg'-ind/ となったと解釈され、この動詞は次に示すように、lucra とまったく並行的活用をおこなうことがわかる：

/ veg' - a /	/ lucr - a /
/ veg' - ez /	/ lucr - ez /
/ veg' - ez - i /	/ lucr - ez - i /
/ veg' - eaz - ă /	/ lucr - eaz - ă /
/ veg' - ăm /	/ lucr - ăm /
/ veg' - ati /	/ lucr - ați /
/ veg' - eaz - ă / <sup>17)</sup>	/ lucr - eaz - ă /

もし /g'/ を立てないばあい、他の点で完全にこのカテゴリーに分類される動詞 *veghea* が、直説法・接続法の現在の複数一人称および現在分詞において、条件を記すことのできない特殊な現われ方をする事になり、このカテゴリー中の例外的動詞として記述しなければならない。

7. 以上、名詞、形容詞、動詞の例をあげて、/k', g'/ を別個の音素とすると、形態音韻論上、また形態論上簡潔で整然とした記述をなしうることを示した。

はじめに述べたように、たしかに純粋音韻論的観点からはこの /k', g'/ を別個の音素として立てるべきではないだろう。しかしある言語において、その構造をより体系的に記述するために、純粋音韻論的観点からばかりでなく、その言語の形態音韻的また形態的面をも考慮して音素を設定したほうが、はるかに都合がよければあいには、そのようにして音素を設定することも許されるのではないだろうか。そしてルーマニア語における /k', g'/ こそまさにこのような理由により別個の音素とするにふさわしいと思うのである。

#### 参 考 文 献

- E. Vasiliu, *Fonologia limbii române*. Editura Științifică București, 1965.
- " , Consoanele [k', g'] în sistemul fonologic al limbii române. *Studii și cercetări lingvistice* 5. anul XIX, 1968.
- " , On some morphophonemic implications of Petrovici's phonemic description of Romanian. *Revue roumaine de linguistique*, tome XIII, 1968. No.6
- Manoliu Marcela, *Propuneri pentru o nouă clasificare a flexiunii adjectivelor în limba română*. *Limba română*, X, 1961. No.2
- G. R. C. Mosil, *Problèmes posés par la traduction automatique. La déclinaison en roumain écrit*. *Cahiers de linguistique théorique et appliquée* I, 1962.
- P. Diaconescu, *Un mod de descriere a flexiunii nominale cu aplicație la limba română contemporană*. *Studii și cercetări lingvistice* XII, 1961. No.2

#### 〔注〕

- 1) ルーマニア語の音韻体系については、ロマンス語研究 Ⅷ 1 の、田中春美氏による「ルーマニア語における子音結合について」および同誌 Ⅷ 2 の、鈴木ひろみ氏による「ルーマニア語における名詞形態論」を参照のこと。
- 2) たとえば Anca Belchiță, *Les semi-voyelles dans la grammaire transformationnelle de la langue roumaine*. *Cahiers de linguistique théorique et appliquée* V, 1968.

- 3) 参考文献参照。
- 4) 参考文献のうちの Consoanele ……。
- 5) 注1にあげた両氏の用いている音素記号とは異なるものを用いている。差支えないかぎりルーマニア語の通用文字に近いものを用いた。
- 6) puști があるが俗語なので除外する。
- 7) Cは子音または子音連続を, Vは母音を示す。
- 8) Fonologia limbii române.
- 9) 二重母音であることを示すにも+を用いて /e+a/ のように表記する。
- 10) 「名詞系」は nominal の訳語のつもり。
- 11) 複数形 gălbui の解釈などについてはここでは触れない。
- 12) gălbue と解釈し, ルーマニア語の発音の特徴として, 二個の母音がならぶとき, 間に [j] が入るとも解釈できるが, ここではいちおう音素として考えた。
- 13) E. Vasiliu, Consoanele …… より氏の立てた法則を使わせていただいた。
- 14) この項において用いた論法は E. Vasiliu のものである。ただし用いた動詞例は, 氏においては truncea であるが, veghea のほうが適していると思い, veghea を用いた。
- 15) base が -i で終る動詞にかぎり一人称単数において -i という屈折接辞をとる。
- 16) participiu と gerunziu を過去分詞, 現在分詞と訳すのは正しくはない。適訳がないための機能から考えてのこじつけである。
- 17) veghează は /veg'-az-ă/ とも解釈しうるようであるが, 他方 /lukr-az-ă/ でなく /lukr-eaz-ă/ なので, /veg'-eaz-ă/ のほうがよいと思う。しかし vegheati のほうは, おなじく /lukr-ați/ と並行して /veg'-ați/ としたほうがよい。